# 酒呑場遺跡 ～さけのみばいせき～〈北杜市〉

酒呑場遺跡は、今から 4,500 ～ 7,000 年くらい前、縄文時代前期～中期の集落遺跡です。遺跡は北杜市長坂町にあり、今回は所在する施設の建設に伴って発掘調査が行われることになりました。過去に４回の調査が行われた、八ヶ岳南麓の豊かな縄文文化を表す山梨県を代表する遺跡です。

今回の調査では、小さい面積ながら縄文時代の住居跡 12 軒、土坑 89 基、集石遺構 1 基が確認され、土器や石器も 75 箱以上出土しました。これまでの酒呑場遺跡の集落や遺物は、縄文時代中期中頃のものが大変注目されていました。しかし、今回は縄文時代中期の後半がメインで、この時期を代表する立派な石囲炉（いしがこいろ）や、大型の埋甕（うめがめ）の発見があり、酒呑場大集落の新たな一面を捉えることができました。

大型埋甕出土のようす

平成 29 年度に実施した酒呑場遺跡の発掘調査では、土器や石器が多数発見されました。中でも目を引くのが、縄文時代中期後半（約 4,500 年前）の大型深鉢（ふかばち）です。この深鉢は、住居の入り口付近に逆さまに埋められていました。いわゆる「埋甕」と呼ばれるものです。土器を焼いた跡に小穴を空けた底の部分も一緒に出土しましたが、土器の下半部はほとんど見つからない、不思議な出土状況でした。また、縄文時代前期後半（約 6,000 年前）の土坑からは、白い滑石（かっせき）で作られた装飾品が２つ出土しました。装飾品は貝製品を真似たような形をしていて、着けた亡きがらを埋めたお墓だったのかもしれません。

滑石の装飾品

# 狐原遺跡 ～きつねっぱらいせき～〈笛吹市〉

狐原遺跡は笛吹市石和町中川にある県立高等支援学校桃花台学園の付近に広がる平安時代の集落遺跡です。平成 8 年度に桃花台学園の北にある県立旧園芸高校の農業用車両教習所建設に伴って埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、9 世紀ごろの住居跡が多数見つかりました。また、住居からは、土器に様々な文字が書かれた墨書土器が約 450 点出土しています。

今回は桃花台学園のグラウンド南西隅に浄化槽等を敷設することになったため、調査を実施したところ、竪穴住居跡が確認されました。前回の調査では、9 ～ 10 世紀の集落が中心でしたが、竪穴住居跡の近くから 11 世紀ごろの柱状高台付土器という器の底に脚を付けた土器が見つかりました。もし柱状高台付き土器が住居に関わりがあるものだとしたら、時期によって住む場所を変えていたのかも知れません。

遺跡で出土した柱状高台付土器

柱状高台付土器は平安時代後半から中世をまたぐ 11 世紀から 13 世紀の間で使われた土器です。遺跡の付近では古代より多くの遺跡があり、柱状高台付土器は西田町遺跡という中世の遺跡から出土しています。狐原遺跡の周辺は 9 世紀以降の調査事例は少なく、より新しい時代のようすは考古学的にあまりわかっていません。しかし、今回出土した柱状高台付土器は 11 世紀ごろのものであり、9 世紀以降もこの地で人々が活動していたことが確認できました。

# 県内分布調査の成果

この事業は文化庁の補助を受けて行うもので、試掘･確認調査、立会調査、分布踏査があります。

試掘・確認調査とは、遺跡の範囲内や遺跡がある可能性の高い地域で開発事業が行われる場合、その一部分を試掘し、遺跡があるかどうかを調査することです。遺跡が確認されれば工事前に発掘調査が必要になります。立会調査とは、狭い範囲や遺跡がある可能性が低い地域の工事に立ち会うことです。工事中に遺跡が確認されたときは、いったん工事を止めて遺跡の調査・記録を行います。分布踏査とは、工事の事業計画に基づき、市町村教育委員会と連携して、事前に遺跡の有無や可能性を調査します。

県内分布調査の成果の一部（遺跡発掘展 2018 で公開）

青磁

この青磁（せいじ）は、峡南地域単位制総合制高校建設事業にともなう試掘で発見されたものです。青磁というと青や緑色の磁器を思い浮かべますが、酸化炎焼成（さんかえんしょうせい）によって稲穂のように黄褐色になったものを米色青磁といいます。米色青磁は、光によって青磁のような青や黄褐色が強くでるといった多彩な釉調が特徴です。特に発見された時期のものは、中国から渡来した可能性が非常に高いと思われます。

発見されたこの青磁は、土層などから中世初頭と考えられています。試掘をおこなった市川三郷町町民会館の敷地は、芦川と笛吹川の氾濫原と考えられていましたが、他の出土品などから、平安時代に土地利用がされていたことがわかりました。しかも、中世初頭には、青磁を保有できる有力な豪族階級がいたことが推測されます。

# 安道寺遺跡 ～あんどうじいせき～〈甲州市〉

安道寺遺跡は、甲州市塩山中萩原から下粟生野に位置する縄文時代中期（約 5,000 年前）を中心とした集落遺跡です。山梨県教育委員会が昭和 51（1976）年に実施した発掘調査から出土した遺物の一部は、県の有形文化財に指定されています。埋蔵文化財センターでは、安道寺遺跡を含めた甲州市の重要遺跡を今後の開発から未然に保護する目的で、遺跡の広がりや性格を調べる詳細分布調査を平成 26 年度から実施しています。写真は、安道寺遺跡近隣住民が過去に発見した釣手（つりて）土器です。釣手土器はほとんど欠損のない優品で、縄文時代中期の豊かな文化が表されています。

釣手土器は、縄文時代中期に特徴的な土器ですが、一つのムラから多くても 1 個か 2 個程度しか出土しない特殊な道具とされています。土器にはアーチ状の釣手が付いており、吊り籠（かご）のような形となっています。釣手の頂部には人面装飾（じんめんそうしょく）があり、それを両側から囲むようにイノシシの姿をした装飾が２匹付いています。釣手土器は、土器の内側で火を焚く、マツリのための道具と考えられていますが、この出土品にはその痕跡は認められませんでした。似たようなデザインの釣手土器はこれまで見つかっておらず、たいへん貴重な文化財と言えます。

釣手土器